

大地

第 51 号
2016. 1. 28. 発行
浄 國 寺
〒314-10
025-523-5724

「俳句」

山崎 睦

落椿雪に沈みて紅を置く

筍のそっけなき味好みけり

死ぬ不思議生くる不思議や彼岸入り

新緑の奥へ奥へと九十九折

新緑の頃に逝きたしとも思ふ

トンネルを抜けて夏霧抜け切れず

(平成十七年 作—八十九歳)

みつたぐない

山崎隆史

小学生の時に、学校の先生が「『きつちやない』という言葉はきつちやない言葉だけれども、標準語の『汚い』という言葉よりもいかにもきつちやない感じがしていい」といふような事を言われました。まったく同意する所です。方言というのは標準語（今は共通語と言うんですか？）よりも感情を乗せる事ができるように思います。

ところが私は、地元新潟県頸城地方の方言をあまり使えません。

小学校の低学年くらいまでは方言を使っていたしやべっていたのですが、成長するにつれてなぜか方言を使わなくなりました。その後地元を離れて長く石川県で暮らしていたこともあり、方言を使おうとすると、色々な地方の方言が中途半端に混ざり合った、あやしい言葉づかいになってしまいます。

地元出身なのに地元の方言を知らない事もあります。例えば、こんなエピソードを聞きました。長野生まれの親戚が淨國寺に来て風呂に入る時、亡き曾祖母に「おしずかに風呂入りない」と声を掛けられたそうです。これは新潟県頸城地方あたりの方言で「ごゆるり風呂に入ってください」というような意味らしいのですが、その親戚は「騒がず静か

に入浴せよ」と言われたのかと勘違いし、声を出さないように静かに風呂を使ったそうです。ですが、私には「おしずかに」という方言が分からず、面白さも半分くらいしか伝わりませんでした。

さて、地元の方言で私の好きなものがいくつかありますが、「きつちやない」（汚い）、「ばらこくたい」（乱雑に散らかっている）、「みつたぐない」（みつともない、見苦しい）あたりが特に好きです。

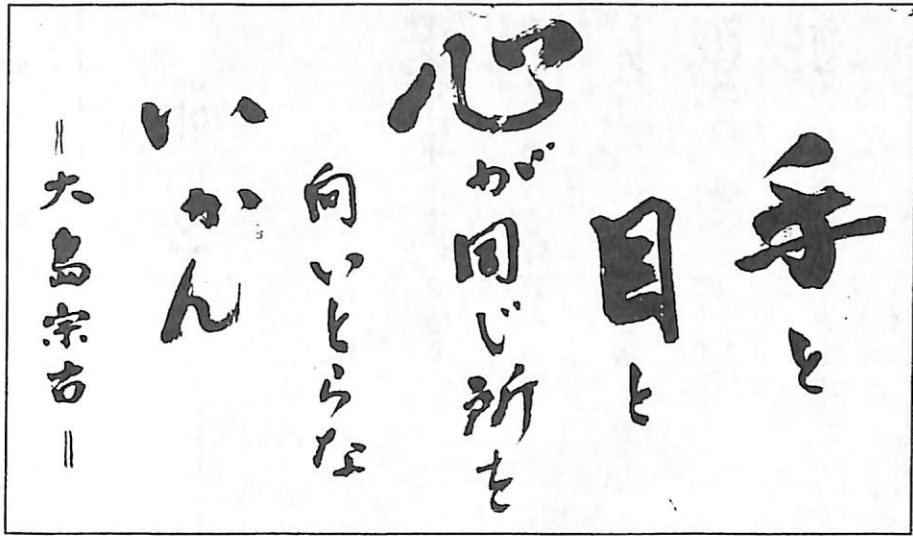
「みつたぐない」は、明らかに「見たくない」から来ている言葉だと思えます。「見苦しい」よりも直接的で気持ちのこもった表現です。見苦しい服装や態度というのは、見るのが苦しいのです。見たくないのです。

雪で列車が止まった時に駅員さんを怒鳴りつけるとか、欲しい商品が売り切れていた時に店員さんにわめき散らすとか、そういうみつたぐない真似をする人がたまにいますが、見たくありません。本当に余裕の無い状況で、そうせずにはおれない、という事もあるのでしょうか。

自分のみつたぐない所を直視するのが大切なのである、とか殊勝な事を書けばきれいにまとまるのですが、なかなかそうは思えません。それでも、自分でみつたぐない振る舞いはできるだけしないように、とは思っています。

「手と目と心が
同じ所を向いとらないかん」

山崎隆史書（浴え文も）

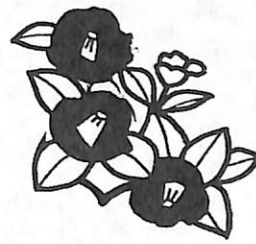


手と目と心が同じ所を向いとらないかん

金沢の茶人、大島宗古（おおしまそうこ）先生（故人）がおっしゃっていた言葉です。

お茶の点前の時、手が動く先を見ていなかったり、目で見ていても心は別の事を考えたりするのを戒めた言葉です。手が動くこうとしている先を、目でしっかり見て、心も余計な事を考えずに動きの事を考える、という事です。お茶の点前に限らず、何にでも当てはまる言葉だと思います。

書家の相馬紅雲（そうまこううん）先生にお手本を書いていただき、それを見ながら書きました。



「目」「手」そして「心」

山崎隆昌

新年を迎えるに、自分が感じている言葉を捜し出し、墨書して外の掲示板と本堂の黒板に掲示してきました。

昨年の暮れ、住職の息子に「掲示板か黒板のどちらかを担当しなさい」と、もう無くなりつつある父親の権威を最大限振り回し宣うた。息子は「え〜マジ、そんな」と一方的な言い方になんて不服そうであったが、結果は前掲の「手と目と心が同じ所を向いとらない

かん」である。

浴え文で「お茶の点前に限らず、何でも当てはまる言葉だと思います」と書いている。

ニュアンスは少し異なるが、同じようなことを二十年前に聞いたことがある。

話されたのは、元信楽園病院副院長で特養ホーム施設長の笠井久司先生（故人）。

老人福祉施設の全国大会が沖縄で行われた帰りの飛行機でのこと、次のように話された。

「山崎さん、欧米の水準からみて、日本の医者ね、医学はまあ平均並、医療はトップクラスです。けれども医道は無いに等しいのです。日本の医学部に医道の明確な教育カリキュラムがありません」

謙虚で穏やかな笠井先生がどのような気持ちで、私にこの話をされたのか。

ここで言う医学とは知識であり「目」と言えよう。医療とは医者としてのスキルであり「手」といえる。言うまでもなく医道は「心」

哲学、倫理、人間論、あるいは宗教論などもこのことは、医師に限らず、看護師、教師

介護福祉士など、人が人に関わる職業には、その仕事におけるプロとしての「学」目

「術」手「道」心」が総体として求められると言われたのであろう。今一度ゆっくりお聞きしたい話である。

笠井先生の静かな笑顔が懐かしい。

人の本性とオオカミ

寺町2 田中 栄

小学校低学年の暴行行為の多発化、十六歳の女の子が父親を斧で一撃、殺してしまいました。どの事件もどの行為も、聞いた誰しもが、その子の親の言葉にならない苦しくつらい気持ちを思うのでしょうか。

世の中が複雑すぎて、親や人との絆のありがたさが分かりにくくなり、人との関わりや協力の大切さが理解しにくくなった昨今、先ずもって自分の存在の意味を知ることが必要だと思えます。

人間との関わりで、凶暴さでよく登場する生き物に「狼」がいます。ちょっと「狼」について調べてみました。

「狼」は犬の仲間で、ヨーロッパ、アジア、アメリカの寒いところに生息する肉食動物で「遠吠え」することよく知られています。普段は一夫一婦で生活し、ことある時は三十頭〜四十頭の群れをつくり、年長の雄が指導者になって理知的に行動するそうです。

日本のオオカミは狼(けもの偏に良)の漢字が示す通り、田畑を荒らす鹿や猪を捕食する益獣とされてきました。しかし狂犬病の流行により、捕殺され絶滅してしまいました。

また地方では「御犬」と呼称され、神の使

者として人間を救い守る者としてあがめられている所もあるそうです。

長野県ではオオカミを山の神として信仰しオオカミが子を生むと、団子や餅を重箱に入れて穴の入り口に置いてくる風習があったそうです。

イソップ物語にある「狼少年」のお話は、いつも「狼が出た」と嘘をついたため、本当に狼が出た時に誰からも信用されず助けもえなかつた話です。

次は実話で、昔インドの山奥で狼に育てられた姉妹が、イギリスの宣教師によって保護され人間の子供として育てられました。

しかし妹のアマラ(四歳)は一年足らずでに死んでしまい、姉のカマラ(八歳)だけが人間としての教育訓練をうけます。

カマラは、五年ほど二本足で歩き、人間の言葉も少し理解するようになりました。しかし、狼の本性は消えず、人のぬくもりや優しき、人の関わり方は解らぬまま、十七歳で亡くなります。九十五年前の有名な話です。

この話は「狼に育てられた人間は人になれない」「人間は人間に育てられこそ人になれる」という事実を残しました。

時代がめまぐるしく変わっても、人の人としての本性は何かとひもとけば、必ず今の自分に疑問を感じます。

今ここに生かされている自分、自分が存在

することの意味を知り、自分につながる先祖と親の恩を知り、人間生活の仕組みと、そこに住み生活する人々が持つべき心構えを理解することこそ大切だと痛切に思うこの頃です。

田中さんは、ご夫婦で浄國寺同朋会の会員、九年前にそろって帰敬式(生前法名)を受けられました。

長年、学校教育に心血を注いで来られました。また絵画にも長じておられます。

この度は「人の人としての本性は何か」という重いテーマについて書いて頂きました。

オオカミと人との関係を述べられ、さらにオオカミと人の本性の違いは何だろうと問われます。

親鸞聖人は唯円房とのやりとりの中で、「わがころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも百人千人をころすこともあるべし」(歎異抄十三章)と人の業縁について述べていますが。

このテーマは、社会一般の事としてはなく、自分の事として考えることが求められているでしょう。



日光林間学校の二日間②

町田市 久保みなつ（六年）

《二日目 七月二十二日》

【湯滝、戦場ヶ原ハイキング】

湯滝は華嚴の滝ほどの迫力は無いが、真っ白で美しく、滝のすぐ近くまで行くことができるので気持ち良かった。

戦場ヶ原は、とても良い所だった。湿原の木道をひたすら歩くだけなのだが、ホザキシモツケやニッコウアザミ、カラマツソウ、シラネフウロ様々な植物と青草が男体山の麓まで続く景色は最高だった。

このハイキングはクラスでまとまってゆくものだったが、いつの間にか先生と距離がだいぶ広がり、本当にまともについてきているのは五、六人しかない。私は「まともについて来てない奴」として、同じ班の女子と少し後の方を歩いていたのだが、あまり景色がいいので見惚れていたところ、木道を片足踏み外し、ズボットと右足を思いきり中に突っ込ませてしまった。

いくら草原に見えてもそこは湿原の戦場ヶ原、ズボンがドロドロになってしまった。

後日、しおりを読み返したところ注意点に「木道を踏み外さないように」と書いてあり、しかも太字で記してあるで「踏み外した」本

人は失笑してしまった。

【サマーリユージュ】

サマーリユージュの実態は、実際に体験した私もよく分からない。単純なつくりの平たい車のようなものになり坂道を下る。絶対安全なものと思っていたが、そうでもないらしく、二回やって四回脱線してしまった。自転車くらいの速度で急カーブの道もあり、普段は自転車に乗らない私は少し怖かったが、慣れると気持ち良く楽しかった。

【ロープウェイ・足湯】

八人乗りのゴンドラに班ごちゃごちゃで乗り込み、山の頂まで行くのだが、その景色の素晴らしいことと言ったら！。ぎゅうぎゅうでかなり暑いが、間近に迫って来る木や、遠ざかる風景に目が釘づけた。

乗っている時「もしもここでゴンドラが止まったら」という話になり、一人「ここで止まったら、この窓から抜け出しこのロープを伝って、あの支えの柱まで頑張ればいけないか!？」と言う子がいたが、その距離を見ると「頑張れない!」と思ってしまう。やがて山頂に到着し、暫く足湯につかっていたが、途中からかなり霧雨が降ってきたので、みんなタオルを頭からかぶって急いで帰りのロープウェイに乗り込んだ。

帰りは、同じ班の子と先生を合わせた計六人で、暫く雑談をしていたが、行きのゴンド

ラで出た「もしもここで止まったら」という話がまた話題になった。と、その時「……止まってしまった。」

あんな話の最中だったし、みんな呆然としていたが、三十秒ぐらいで動き始め、無事麓に到着した。

《三日目 七月二十三日》

【日光江戸村】

江戸村は精密に江戸の町が出来ていて、店員さんは皆着物で鬘を結っていた。江戸村では円のことを両で示すので五百円のは五百両となる訳だが、両は当時じゃ大金だから「団子一本百両」なんて看板を見るとゾッとしてしまう。

通行手形という紙さえあれば、お化け屋敷や忍者屋敷等に入ることが出来る。私達の班は、他の一つの班と共に最初にお化け屋敷へ行ったのだが、みんな（特に男子）怖がって入り口をウロウロしてるばかりなので腹が立って来た。結局二つのグループに分かれて入ったのだが、実際は一つのグループと言いたいぐらいくっついていて。お化け屋敷は、化け物の姿の人が襲って来たり、コンニャクがぶらさがっていたりするのかと思っていたが、ただ閻魔様や亡霊の人形があるだけで、怖いと思えば怖いかも知れないが、怖くないと思えば怖くないものだった。

その後。忍者屋敷や大迷路等のアクションを楽しんだが、あっという間に帰る時間になってしまった。

なんやかんやで、日光林間学校は終わってしまった。とても楽しかったが、それ以上に疲れてしまっているという情けない私。これが六年間で一番の思い出かどうかは分からなけれど(苦笑)、いい思い出という経験になったのは確かだ。小学校生活もあとわずかだが、少しでも多くのことを経験し、思い出を作っていきたい。

とても長くなってしまいました。最後まで読んでいただき本当にありがとうございます。

「晴考雨読」で想うこと

新潟市 豊岡 覺

「酒もすき餅もすきなり今朝の春」

私の好きな虚子の新年の句である

新しい年を迎える感想は、人それぞれ違ふと想うが、何かほのぼのとしたものが伝わる。

かくいう私も馬齢を重ね、数えて「古希」となった。

七十年近く人生を過ごし振り返ってみると何も足跡らしきものはない。毎日晩酌をして「今日も生きてたなあ」と一日を送るだけである。冒頭の句が好きな理由でもある。

お正月が来ると、嫌でも年齢をとらなくてはいけないのが数え年であった。

私は十二月生まれなので、生まれた時が一歳、数日して新年を迎えると二歳であった。

昭和二十四年五月に「年齢のとなえ方に関する法律」が公布され、誕生日で数える満年齢になって七十年、数え年で年齢を示すのは「厄年」くらいであろうか。

子供を授かって十月十日、母親の胎内に生きていたのだから、生まれた時は「一歳」と数えるのが理にかなっていると想うのは私だけであろうか。

十月十日、無事に育つかどうかわからない。まさに「神のみぞ知る」と云える。

母親は丈夫に生まれてくることを信じて、お腹の子を育てているのではないだろうか。

「子供の最初の日本語の教師は母親である」と言われている。お腹の子にどのような言葉で話しかけるのであろうか。

「チヨ」とか「らぬき言葉」で話しかけられて、大人になって「日本語が乱れている」と言われても、子供に罪は無いのではないだろうか。

私も正しい日本語で話したり書いたりして

いるかと言われると自信がない。気を付けて話すように努めてはいるが

閑話休題。高田は第二の故郷と云ってよい。四十数年前この地に勤務していたことがある。

この地域(上越地方)の交通体系や土地利用の仕事を担当しており、いろいろな所を訪れたことを懐かしく想い出す。

一晩で二層もの雪が積もったことも体験したし、二月一日付けの異動で引越した時は、「こんな時期に引越するなんて」と不動産屋にあきれたこともあった。

第二の故郷高田を想うことは、人情の厚さと、風情豊かで長い歴史を彷彿させる街の風景で、オヤッとおもう小路で見かけた「門」や「庭」にそれを感じた。今も鮮明に記憶がよみがえる。

北陸新幹線の開通で、往時の面影も薄くなったであろうが、もう一度散策してみたいと想う今日この頃である。

豊岡さんは、県職員を長年勤められました。筋の通らないことが嫌いで、信念をもって仕事に当たられたのです。定年を前に脳梗塞に罹られ大変なご苦労をされます。

その結果が「晴耕雨読」から「晴考雨読」になられたのでしよう。

親鸞聖人は「聞思せよ」と述べられますが、うがった言い方をすれば「聞雨読」「思晴考」となりはしないかと思えます。

ワン公物語⑫



—華のつぶやき—

山崎華(慎子代筆)

私は華。八才七ヶ月の雌のパグ犬。

近頃母さんがしきりに「華、吠いてよ、何でも良いからお願ひ」と言う。どうやらまた『大地』の発行が迫って来たのだろう。『大地』の発行は、今から三十七年前のことだし最初に手掛けたおじいちゃんのこととも私は知らない。母さんによれば、癌で声帯を失ってしまったおじいちゃんが、家に居る時間が長くなったのを機会に第一号を発行したんだそう。B5版の素朴な作りで、紙面はおじいちゃんの違いに溢れていたらしい。

やがて母さんが受け継いで何とか頑張ってみたのだけれど、いつしかときれとぎれになり、発行の度に弁解とお詫びを繰り返して、やがて自然消滅……という頃、なんと父さんが頑張り始めた！頑張りついでに、年三回発行と決めてしまったから始末が悪い(?)

時期が来ると原稿の催促がくる。厳しくはないのだけれど、決して諦めない辛抱強い催促だ。曰く「去年は今頃もう出来ていた」

「他の原稿は皆揃っていて、その分のワープロは打ち終わっている」等々。そう、父さんは何と今ではもはや骨董品とも言えるワープロ「書院」で、あの『大地』を作成し、印刷

し、封筒書きから発送まで、ほぼ一人でやっているんだって。

時々呆れ気味の母さんが「プロに頼めば良いのに」と進言するのだが、その気はないらしい。そしてミスを発見する度「ギャー、キーン」なんて口惜しがらるのだ。でも多分父さんは一連の作業が決して嫌いではないのだろう。むしろ性に合っているのではないかなと思はす。こんなふうにも思考する私は、犬なのに随分お利口な奴だな、と我ながら思う。父さんを褒めついでに、自分も褒めて、それも、まァ イイか。

母さんが私に「華、吠いてよ」と言うのには訳がある。父さんが母さんに原稿を要求する時「何でも良いから」とは決して言わないのだ。必ず「ワン公物語頼むね」と言うのが母さんは些か気に入らないらしい。母さんだって他にも書きたいことが有ったりして、今回は違うモノを書こうかなアと言っても、決して認めてくれない。「ワン公物語は評判が良いですからね、休む訳にはいかないのです」と父さんの殺し文句。母さんも悪い気はしないもの、ホントかな？ホントかな？と、かなり懐疑的なのだ。

実は四年程前、母さんは一本の原稿を書いていた。母さんなりに結構気に入った仕上がりになったと思っていたのだが、いつまでも日の目を見ることもないまま、時が流れた。そ

の原稿を今度こそ載せて貰おうと思ひ、母さんは専用の抽出しを探す。ところが見つからないのだ。読み直すと恥ずかしい代物や、いかにも駄作は出てくるのだが、肝腎の原稿が出てこないのだ。

焦る母さん。でもね母さん。多分それはシュレッターに掛けられ、ゴミに出され、焼却場で燃やされて、煙りになり天高く昇って消えたと私は思うよ。だって母さんときたら、時々殆ど衝動的にモノの始末を始めるからね。

「断捨離」ということばはどうも好きじゃないけど、そろそろ身辺整理かななんて言いながら、はた目には結構大胆に袋に詰めたり丸めたり切り刻んだりするのだ。見ているとハラハラしたりするんだけど。

だからその原稿だって、多分古い日記なんかを処分する時に紛れこんでシュレッターに呑み込まれてしまったんだと思うよ。今度は母さんが「ギャー、キー」と唸る番だ。

「あなたがいつまでも使ってくれないからどっかに消えちゃったでしょ」残念と怒りの矛先が父さんに向かう。父さん少しも慌てず「しずこさんは時々びっくりする位シュレッターをつかいますからねえ」

母さんにしても腹立ちまぎれの責任転嫁は重々承知しているので、あとはシヨボンとしているのだ。眺めているとおかしな夫婦だなと思うけど、まァ イイか。

(以下 次号)